

建設トツプランナー フォーラムin豊田

■ 2 ■

地域の森林や川、生態系をどう守っていくか。フォーラムを主催した中部森林開発研究会の梅村正裕会長ら3人が取り組みを発表した。

樹木廃棄物を有効活用する「ウッドチップリサイクル工法」の普及に取り組む中部森林開発研究会は、創立28年を迎えた。「川に清流を、野山に緑を」のスローガンの下、中部地区からスタートした研究会は、いまでは北海道から沖縄まで14支部、会員111社を擁する規模になった。

29年前、木材の自由化、林業従事者の高齢化が進む中、「かけがえのない森林を何とか守ろう」と立ち上がった。1地域、1企業、1個人ではとてもできないことではない。まずは「中部はひとつ」を合言葉に、研究会をスタートさせた。梅村会長はそう振り返った。

資源を100%活用

研究会が当初から掲げているテーマは「森林資

事例発表Ⅰ

森と水と生物多様性



森林を通じて環境を保全

梅村正裕・中部森林開発研究会会長

源の100%活用」。良い木材は、どんな時代でも需要があり、流通する。しかし、林業経営が成り立つためには、低質材をどう活用し、利益を出すかがポイントになる。樹木の幹の部分は建築用材、土木資材、造園資材などに活用されるが、大量に発生する枝、根、葉などは、長年にわたり、山に捨てたり、埋めたり、燃やしたりしてきた。これを資源化しようという

のが研究会の活動の原点だ。造成工事現場では伐採に伴い発生する廃棄樹木を、穴を掘って燃やしていた。しかし、廃棄物処理法の改正でそれもできなくなり、処分に困っていた。そこで大型の破砕機を導入しチップ化することで資源に変える方法をつくり上げた。しかし、破砕しただけでは資源にならない。最初は2次破砕をかけていたが、スクリーンの網目を換え、チップのサイズを調整することで品質が高まった。さらに、チップを散布する機械「パークプロア」を導入。長さ約100mのホースを使い、法面にチップを吹き付ける緑化工法に取り組んだことで、チップの資源化が軌道に乗った。

今では、派生商品も増えた。細長いネットの袋にチップを詰めて利用する「フィルタースックス工法」や「エコ法枠」、カラーチップマルチング、竹ソダと竹チップを組み合わせた濁水処理システム、ウッドチップ樹脂舗装など、活用の幅も広がりをみせている。また、本業以外でも、京都府や茨城県で鳥インフルエンザが発生した時には、石炭散布などの協

力要請を受けたり、洪水被害があった地域を支援したりし、表彰された。

未来の子もたちに

「緑豊かな自然環境を守るという視点だけでなく、新しい自然を創造し、緑の復元を促進する独自のシステムを全国に広げたい」(梅村会長)。同研究会はこれからも、勉強会や実技講習などを通じて、相互に助け合う全国的な会員のネットワークに磨きをかけていく方針だ。

梅村会長は「未来の子どもたちに誇れる自然環境を実現するため、青い空、森林の緑、澄んだ水の環境づくりをしていきたい」と話した。

(建設新聞社(仙台) 小島義弘、建通新聞社 荒木勝己)